

書魂精駭

特別
イ 4
3159
B 48

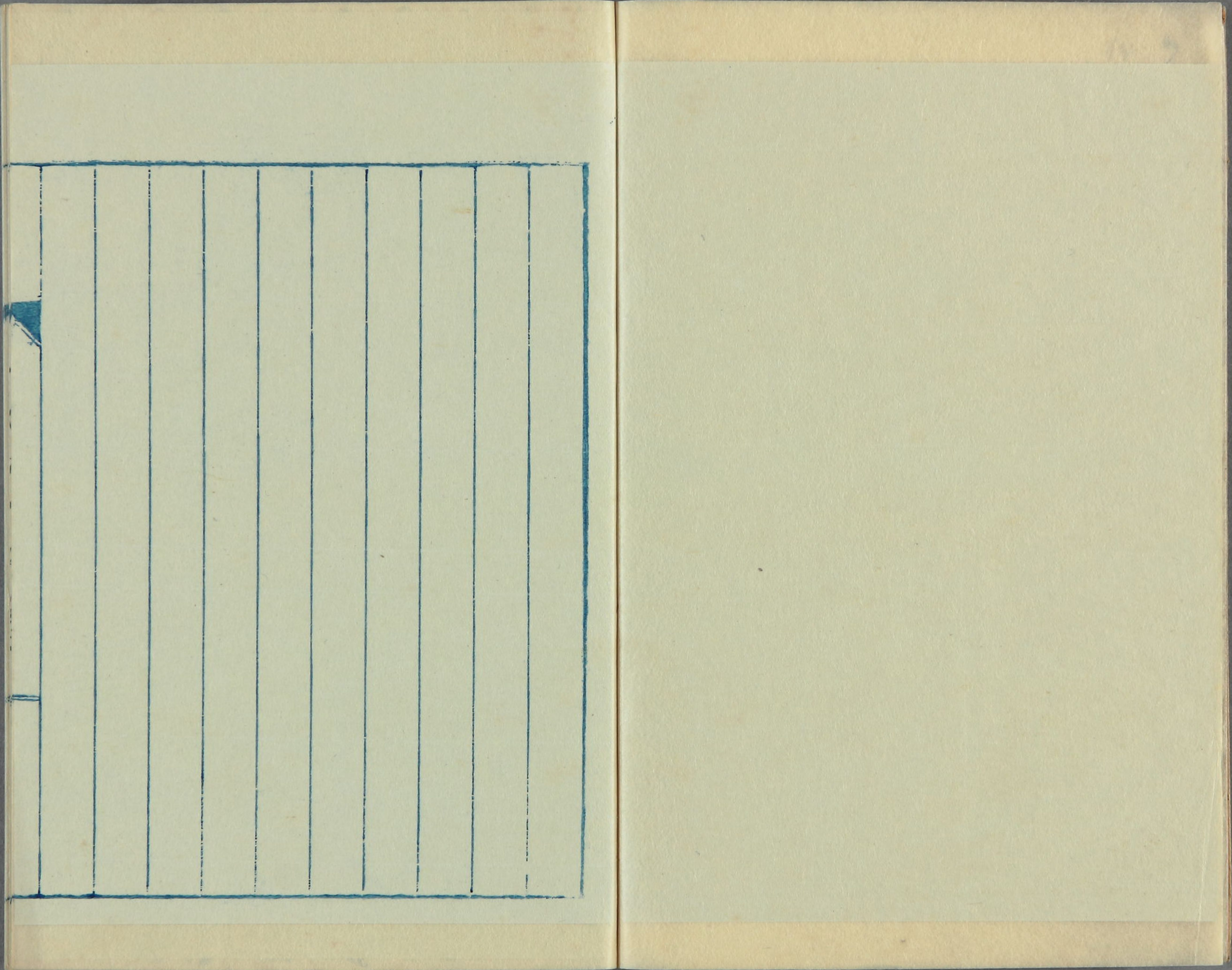


14

3159

848

子
の
つ
き



目次

おくのふき道

古世歌

蕙門陀陀物語

涼袋

中川

妻伴

枕草紙抄

法師の巻

越路を旅りし條

涼袋

花鳥日記

了阿

七部集末巻句

坐禪和讃

白隠

借選百首

古書

〇片雲

杜若江濱、玉干緯、舞後、下、十、五、卷、三、三
江漢思歸客、乾坤一腐儒、片雲天共遠、永
夜月同孤、為日、猶、怯、秋、風、病、臥、愁、長、來
存、在、鳥、不、必、取、長、蓬

段改を故増也

おくのわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま
おののわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま



〇らく。陸奥、
〇細道。明法の
初、中、三、の、通
庸、の、為、太、道
と、ま、り、り
〇ま、せ、丸、の、ソ、ソ、
ハ、セ、ラ、蕉
〇月、日、三、の、本、白
春、夜、宴、柳、春、園
亭、光、陰、は、芳、氏、之
留、客、
〇旅、人、ッ、天、地、若
事、物、之、逆、旅
〇舟、の上、馬、の、口
馬、の、脚、靴、上、靴
之、逆、舟、舟、舟、舟
〇日、之、旅、は、終、る
赤、日、々、旅、は、さ、り

おくのわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま

おくのわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま

おくのわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま

おくのわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま

おくのわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま

おくのわろさよ、但、若、上、川、の、原、を、い、ふ、ま、う、そ、き、り
い、た、ま、う、歌、の、み、あ、り、て
ま、ま

くわいんり

旅之 賦に 相島 子銀 〇秋 〇日

張ら病んで夢
は神神をいかに
うらまを望み出さる
○友人まき。字祇
は箱根。
○色雲。杜松花
日邊雙鳥晴天
羨片雲一作卷
又運隠于重石州
留一片雲。中敦山
荆王林上東世
秀莫柱陽巷一
片雲
○去年の秋。元行
元。九月佐州の
詠の紅を砂を。津川を元カ。あを初。し。る。老。毛。布。
江上。な。り

○雲の空。都。そ。は。あ。い。と。た。ま。さ。う。く。と。お。り。の。空。雲。司。
○白河の雪。鹽田
西河郡古宮村
字旗宿。今。の。白
河。舟。中。約。三。三
○さう。ち。外。漫。
吉。名。の。秋。好。む。
舟。中。り。し。の。み。ま。
に。は。又。あ。つ。旅。を
い。ん。と。ま。は。は。ま。ら
る。行。と。ま。つ。
○手。に。つ。つ。す。途。の
腰。引。は。の。つ。つ。
足。り。歌。の。あ。
ま。に。う。つ。つ。り。
○金。す。ん。あ。い。を
く。杉。崎。を。み。み。し
や。り。の。杉。崎。し
あ。い。あ。い。し。し。月
を。み。み。し。も。わ。し
○難。の。家。に。時。三
月。の。仕。立。あ。り
し。を。ま。し。

工敷家ののろろしり白川の瀬にそんとそ
ら神のおよばきて心まくらりせ乃祖
祇のきききくあしてぬるあふふつ
すり。しの破れまつり。世の結ゆり。え
て三里よ。あすゆるり。ねねの月先心
しうりて。経める。か。い。人。と。後。り。杉。風。う
別。野。上。し。福。ろ。り

いすより神も経る。お代。そのひる。の。お。代。
面ハ向。と。岸。の。極。よ。お。け。ま。ま。浮。せ。も。ま
の。七。日。明。け。の。の。そ。朧。く。も。し。て。月。ハ。在。明。
詠の紅を砂を。津川を元カ。あを初。し。る。老。毛。布。
江上。な。り

とて芝よ。よ。く。お。つ。ろ。ね。二。の。峰。
幽。よ。み。て。上。孫。谷。中。の。名。の。措。又
い。つ。さ。よ。み。ろ。く。む。つ。ま。ま。う。ん。り。ハ
宵。より。つ。つ。む。て。ま。く。お。り。て。送。ら。ふ。
し。の。く。く。あ。と。て。船。を。ち。う。れ。と。お。余。
二。の。里。の。舟。に。お。ほ。く。あ。さ。り。り。と。幻
の。ち。の。り。離。あ。の。涙。と。う。り。と。え。と。
り。春。や。も。帰。る。鬼。の。目。ハ。泪。
そよよさ。この神。つ。て。行。道。を。と。す。
あ。す。人。と。い。な。し。舟。を。と。ま。り。て。な。り。

○難の家。此。時。三
月。の。仕。立。あ。り
し。を。ま。し。

有勢切幻
電如夜
海如葉
三
三
三
三

昔の意に
旅記

月朝の星山
神録石の着
伊豆の島の方

此日日光山の禁より泊るる所の
るやうにふくみと仰ふたなりとら
出よ上目とするたふし人うへ
一巻の巻の括も折あて体さめ
いろいろ仏の濁せ聖まよふ現
る素門のと食順乳こまの
すけりやとほのなるま
よふとみらるる唯々智さ
あよしてはも偏固の若也剛毅本訓の
仁よふとまふしん気楽の付貨む

あ

月朝の星山
名主方の

憚多く湯殿
あしう団し

星愛山一名男
體山

卯月朝の星山へ泊るは昔は
山よと星山と書しは海大師開基
の時り星と云ふる歳もまよふ
のよふやと云ふ清く光一天く
て恩に八荒よあふれ雲成あ坊の
振るやうに候ふく一筆をけ
つとまふしん気楽の付貨む
星愛山と云ふるは星愛山と云ふ
刺捨て星愛山と云ふるは

李詩飛流直
下三千尺

常衣にば金武しとおもひとまじりて芭
蕉のト成ふくおとろしうて争ふ薪
氷装ふくまきふくこのこむ杉しよ
象河の眺昔くさし中を候ひ且ハ
羈旅の箱とさしりしと旅を曉
と刺して書ははくちんまお五を改
て字悟とす仍てお書ははくちんま
更のこ字力おのこま
廿餘丁のまをせしうて遊む完向の頂
より飛流して百た子さの瓊潭は辰

芳名をまお
守りて

より岩窟よ身をまひらめ入て滝の裏
よりこれうらみの瀧と申侍は侍る也
暫時に流くおらや夏のお
お須のまをれまふく知人あはれい
よりおをまひらくおをるまをゆるし
とすくおまひらくおをるまをゆるし
流日まらぬ農まのあま一おをり
りて明水に又野中よりりりりりりり
おのこまらぬおをるまをゆるし
はら野まひらくおをるまをゆるし

岩名のお
正生村の
おま

きね持ふ
みでの伏線

管仲云死馬
こ智可用力
故名を有在
之遊は始

くぬよのねすいりくすくすおんたさ
は群の縦横よりわたりうみく
旅人のるるさきさきしあや
付水にほさのささる所
あーあーいーほわちい
うりさの法をひてさ
娘とさあさか
あのもさーうりたれと
うちあささ
長と人里よむいあささ

淨坊寺大
嵐の糸を
如雲書片
批を批者
と回巧回曲

冒古書批

甲子十言
乙卯十言
丙辰十言

く結分てさささ
黒羽の籠代淨坊寺
言伝らさひうさぬあさの悦ひ日
新法つりて昔丹
朝夕勤とあさい自のあさ
て就属のさささ
あさささささ
道おのたささ
りてむさ達のあさ
八幡宮よ清と市扇の的を射

三月十三日申
之井白土の欄
字注

三月十四日
はるる
十有六天等

三月十五日
と支那の言は

三月十六日

三月十七日
下五た

一五六八五氏神正八まんとうらふ
一七神社よくはとむらひ蔵通社
とそりりるをみるそりれに桃樹堂
りゆら

修驗光明寺と云有るごとく
きてり者堂とある

友山よ足跡を跡正音途が

當必雪岩寺のおく併頂和尙
山形迄あり

飯詰横の五尺のきぬきりの名

三月十八日
昔は極楽

○山形にあり
又ありとは株
斗はとるなり
和とあるみよ
杉の山
伊豆屋角
十景世
おは神

むらゆらや一雲うりま

と形の岩と云先よき付たりといり
ふやゆらくわよ其路らしと云々

と柵を曳いんとすして昔のいさる
あつて人あつくるのりともありさにして

あり一す彼村よある山におくあるは
しきよと谷をみるよ松枝是く昔をい

しりて卯月のて今おを一十景
ふふ橋よゆらしてゆら

さてりの路いつのりともやうなるの

○妙福源。宗朝の僧。高僧。の位せり。○法多。法運。の位せり。

○此の石。……
○此の石。……
○此の石。……

昔聞洞庭水
今上岳陽樓
老杜

……の……
……の……

……の……石上の小菴
若窟……と
……
……

木啄も……
……
……
……

……と
……

殺生石は温泉の……
……
……

……柳うれ

山子山
山子山
山子山
山子山
山子山

結と断とをさるる
す

風流のぬかおちの田植

下下とさすしとさすしと徳

徳すしとさすしとさすしと

此者の徳すしとさすしと徳

のさすしとさすしと徳

山もさすしとさすしと徳

さすしとさすしと徳

徳すしとさすしと徳

浄土と徳ありと徳

徳すしとさすしと徳

世の人なりと徳

等窮の徳すしと徳

王離徳すしと徳

と徳すしと徳

と徳すしと徳

法を徳すしと徳

り徳すしと徳

り徳すしと徳

檀皮日和
田とかり
甲子年
一徳すしと徳
内子下
を善く徳すしと徳
那山

五月朔の福
 名は
 言 飯塚泊

くりたるしをみて思塚の志を一見し
 福清の福なるあつれいなりよまらぬ物の
 石をみるくもくものちさうりふの陰
 の山軍の石をきく地さうりり里の量
 尸のまらくもあつらふ昔に此のよまら
 せは東の人の志をよまらしめてはるを
 試行するくもみては谷のしをたぬせいに石
 の前とまらるるしりりりりりりりりり
 早苗とらるるのやあつらふしりりりり
 けりりりりりりりりりりりりりりりりり

飯塚飯後
 のあやまの

異名村併
 杜原名所
 飯塚

月の影のやうにまけて漸のどとまらるる
 出川は藤をりりりりりりりりりりりり
 半計りりりり飯塚の里筋路とらるる
 みるくりりりりりりりりりりりりりり
 疾風の四谷也林と大手のたると人の
 飯ゆらふらまらるる酒とあつらふりりり
 の古きしりりりりりりりりりりりりり
 二人の娘うまらるる先をきく也女らりり
 ういりりりりりりりりりりりりりりり
 とははらるるりりりりりりりりりりりり

さしあしすさし入して茶をとりしに
義經の太刀年を後とていし
什あとい

及も太刀を五月つくれ
五月朔のころ也を相領
温泉あはる湯ついで
と造りてあり
もろれいふり
もろれいふり
と造りてあり
もろれいふり

世に暇づす持節はくわたりて清入
斗りるし程水のそとやりし
又議三々お水の余はしす
りまるといふて
とくと
無常の観念道路より
命なりと
下
白石の地より

三白石

おきまはるにのちなること人
しんせいのりしりたふらぬらに後の
軍よりの三つとらぬ神の社り
人の侍今とありとあるはその五月あ
るふいとありとありとれはたそよとる
うり眺やりしていらる義持三つとら
月ぬのれらぬぬらいらる
いよつとらいらる月ぬらいらる
おきまはる

武隈のおよとふめらえる心地りされ根に

武隈の
おきまはる
三つとらぬ
義持

土隈より二本よわなて昔のあり
ふいよととらる先能固は師とむ出は
昔むののうらとて下り一人は本を代
ておきまはるの橋たよとられきとらる
何きはよわおきまはるに
強より代もあらに代ありひい花継と
せやゆめよ今將を歳のくらちやとの
ふひとめとららおのらきとらるん
は

武隈のおきまはる三つとらぬ
おきまはる

五月宮内少輔
因も可嘉石
正太郎は
其の心を
其の心を
其の心を
其の心を

取つたけ玉田
とて地のまを
き取つて一巻
のりせみま
俊成

とらもの〜錢のま〜りらに
桜よりねい本よ三月哉

名取川を渡りて仙臺に入あやあゆく
日や遠者よとあ〜くはら園遊す愛
と畫工かたはつとらものあり解とあ
る若くありて和〜人よ〜るこの若く比
さ〜りら〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
とと〜一日案心す宮城路の表はり
あひて秋の平よととや〜あ〜玉田
よ〜路つ〜〜園に〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

大
みさかひま
とやみま
とあの下
あ〜あ〜あ

日新も〜大杉の林〜入て愛よあ
とと〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
ふ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
若天袖のら社〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
若杉路の地〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
紺の染〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
さ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
り〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
この畫圖〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

八の地うま
たき
あつたて
あつたて
あつたて
あつたて
あつたて

く水より野田の正川仲の名をみるね
ま乃松山いよとせ別てま松山といふ
松のあじい皆墓いししとねを
うり一松をいつめらむ松のまも松
いしくのこまさと松一松も増りて
松うまの浦い入おのりぬまゆん月
あのを解も松て夕月松松く松
う松も松と松一松松の松松松
まて者わうり松くしつるてりま
ま松も松松松松松松松松松松

也其お目盲は師の琴瑟とあし
一と奥上りりりりりりりりりり
たかよあしあしあしあしあしあし
まら洞子のうちと松ちつりりりり
一松松と松松松松松松松松松松
さらあしあしあしあしあしあしあし
うりの神り清國守再興とあし
て松松と松松松松松松松松松松
石の階左奴と松り朝日あしあしのむら
きと松りりりりりりりりりりりり

境として神靈ありては、
多玉の風俗をききといふ貴りれ神
前より古き靈地といふ女の戸ひりの
而より又後三帝和承を命奇進と
五百の手事、伊今目の前よりつひて
う、病より珍、集に勇義忠孝の士
也、佳命今より起りてきりすと、
滅人の道を勤め、名を
先よりきりて、日既午より
船よりして、其間二里

九、
たふ

廬山烟雨
浙江潮未
到千般水
不休到得
来世到得
廬山烟雨
浙江潮

徐耀海の波つて
柿をぬりて、
一か好以て、
東南より海より、
の湖をきく、
歌もの、
わたり、
り、
く、

をのつうしきあひうらうしき
 を宵然とくこ英人の顔を粧ふち
 ちや松神のむくし大いすくしの
 るきふちまよあ造化の天工いつせめ
 くら筆をもちうらうしき
 繪巻う後地つきて海よせうらうし
 也雪も赤禪師のあまの言のたづね
 石るうらうし将おのよたうし世まうし
 南人も解くくくくくくくくくくくく
 松巻うらうしサうらうしうらうしの菴園

江上

はゆるしうらうしうらうしうらうし
 うらうしうらうしうらうしうらうし
 海うらうしうらうしうらうしうらうし
 江上よゆりてうらうしうらうしうらうし
 二階をへてうらうしうらうしうらうし
 うらうしうらうしうらうしうらうし
 せうらうし

松巻うらうしうらうしうらうし
 平いばうらうしうらうしうらうし
 すうらうしうらうしうらうしうらうし

ありま安通ねつ〜とさるのノハチを
送る袋をよめてこまひの友とよみ
杉尾浦よりあつあり

十一日瑞岩ちよ福常ち二十二世の昔
志破去の平中郡出家して入唐の朝の
には開山すまはぬと云ふは禪師の法
化に依て七堂並る及びして金壁の莊嚴
光を輝仏土成就の大伽藍といふは
彼見仏聖のまはつ〜とせさるる
十二日平福常と心さ〜何れものね

五月十日
平福常
瑞岩
志破去
杉尾浦

〜の猪る〜はて人形神々雑鬼
菊菟のけりふる〜こまわつす
路か〜き〜して石の墓〜は清いお
こ〜ぬ〜と〜み〜て〜金花山
海と〜〜か〜数百の廻船入は〜
つ〜ひ人衆地ま〜〜て電の輝
つ〜ま〜〜あ〜ひ〜あ〜す〜あ〜あ〜
〜れ〜あ〜あ〜〜と〜あ〜あ〜あ〜
〜人〜あ〜あ〜〜あ〜あ〜あ〜
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

十言のくま
信野のくま
乃の

十言一
十言一
十言一

ふしり神のちり尾ぬらの牧場の
昔りしるるるあつみてあつるる
そりしあつるるよるふて戸伊と
そあつる一帯して平泉とあつる其間
た余里ふとつたる也

三代の平耀一帯の中りして大
川のたつ一里とあつる有る衡のた
田野りしあつる金鶏山のこ形とあ
すそとる羅りのふしお上川南部
より流るる大河也衣川の和泉と城

杜松春望
國破山河在
城春草正深

まのりして平泉のたつて大河とあつる
康衡あつる河のたつる南都
はとつる聖の夷とあつるみとあ
借も義臣すつるつて城りしこりも
功名一時の美取とあつる國破して山河
あつる城春りして草もあつるつるとあ
あつるつるつるつるつるつるつる
つるつる

あつるつるつるつるつるつるつる
卯のあつるつるつるつるつるつる

南の窓より
光の

並て而も一きら二堂用候す純
堂ハ三將の像との一光堂ハ三代
カ推されりとの一併と安置す七宝
散うきと珠の扉凡とやふし金の
柱業雪と折こ既顔の燈ハ虎の蓋
と敷しとと四面より一團て夢を二復て
凡るを後物何ハ威の記念とらふ
五月るの降の一光堂
南戸道ぬと一と窓の軍一
ゆるハ黒漆の一の光とある

十音の
田和屋止在
五音折た
見し

の陽より辰前の南より出て出羽の
と折しとすは路旅人帰るるふる
と開きとらやとと海と
園よりす大山とのと日既
ハ水と封入の表とこけて人々と
むとら凡るありてうらむと山井
一とるす
登風一の辰する指と
何事一のと先より出羽のむと大山
を降りてるるとらとれいと

山寺の地
あり

いづりちんば〜とてさ〜はら

浄〜さよおを〜とてゆるる也

遠出よ〜のやうてのひまのち

あゆま〜とてゆる〜とみ彩のま

琴鈎する人い古代のす〜豊良

山形鎮〜立石も〜山寺なり兼

覚大師の闍基〜とて御法園の地

也一見す〜このま〜

依て〜もは〜基園

七軍も〜日〜

埜〜岩りのま〜の堂〜の〜岩

〜巖〜重〜お指〜

石〜て若清〜岩上の院〜

用〜の〜岩と〜

と〜て妙園〜佳京山寂實と

〜の〜

関〜物岩〜とみ入野のま

山の上川〜と大石田〜

日和と付意〜古子〜

水〜高水〜のむ〜

芦角てあゆむよかりし草はるる
まわあしつてあはれいふとあま
まりしとじふもみちるるしよる人
しつれとつりさふししあま
しつるるの丸屋あまのあま
家上川いぢちのくまり出た山取は
水よとつこころもあまのあま
ろしき維あまの板敷山のあまは果
酒田の海へ入た右山あまのあま
中へ船をとつとつとつとつとつとつ

いる船とのあま

白糸の海へ青葉の障しつとつとつ
仙人堂岸へつてまゝとつとつとつ
あま

五月あまとつとつとつとつとつ
六月之日羽黒山へつる圖司たつとつ
者よとつて別当代人あまのあま
湯下南谷のあまのあま
のほとつとつとつとつとつ
四日春坊とつとつとつとつとつ

有羽也 雲とくりす南谷

五日権現と詣當山開闢能除大師ハ
しつきの代の人と云ふ事と云ふ事ト喜
式と羽別里山の神社と有書寫里の
字と里山と云ふ事と云ふ羽別里山と
申略して羽黒山と云ふや出羽と云
ふも鳥の毛羽とは國の首と云ふ事
風土記に付とやと云ふ月山は致
と云ふ事と云ふ山と云ふ事當寺武江東叡
屬して天台止觀の月明と云ふ事云

形軌通の法の灯りけりひて僧坊
棟よりく終験行法を勵し其山
靈地の殊効人貴且志る繁榮長
てのてんは山と謂りし

八日月山ののろる本跡と云ふ事
りけ實つ討し政と色浄力と云ふ事
よるひりひと雲雨霧山記の中と氷
雪を踏てのろる八里と云ふ事日月
行乃の雲間に入るとやと云ふ事
殆どくえて頂よと云ふ事日没て

此詩少陰者
白雲三首并

月歌なる世を補遺と枕をこめて
のり子行日出て雲は清きと河原

谷の傍に銀冶小屋と云ふは名の
那治雲水と稱して夏に涼斎して
銀玉打終月山と銘を切て世に
賞さるる彼龍泉の剣を淬と云
干将莫邪のむりしと云ふ道に
堪能の扱ありぬもさしきり
はるし後うりて三りやすぬる

它時相見派
生客若倚
琅玕一段奇

○寒天の梅記
簡齋詩
雪裏を巻
厚結を巻
天梅を巻
る結
りる結
りる結
りる結
りる結

と三人よりなる獨のつらさ
ありぬり積雪の下に埋こ春を
走水ぬる生さぬのまのほりり
きたるの梅を愛よりらりりり
僧正の身の衣も愛よりい出て
下りていさぬ巻るは山中の微なり者
の法戒として他言するも
てまらんとてめて死さす坊に
周圍の雲より依て三山順礼の句
短冊に并

涼しき月の夜
 雲の影も
 清き水も
 心ゆくも
 羽黒も
 重行も
 て誰か
 川も
 不玉も
 何れも

暑き日を海に
 江山の陸の
 霞の寸草も
 の文も
 其際十里日
 去ぬと
 山も
 奇也
 むねと
 の晴を

各注
 西平
 西平
 餘杭
 將哺
 勝
 考

好句時中 携る機西 東波西照 水光激隈 晴倚如山 色空濛而 又奇於把酒 此西子後 松隈林也 相宜
まことの機 20 げうくうん流 てるのうらこく ありのうりあめ

○筆を携 王勃滕王 画棟初飛 南浦重朱 簾幕拂西 山而

やうくくく 出る強く象浮くま
まうくく 先結固峯くまうくく
らうく 無名の神とくわくひひ
の岸くくまとありれそまのどく
とくわく 桜の老木西の林所
の神念をのくま 江よくは陵なり
神功皇后の清墓とくちと干満殊る
とくま ちくくわくありくくく
すすいらくんせくくは寺のすまゆ
片くく心宿と携く風集一眼の中
あて南くく海天をせくくえ 甚くく
つりく 江よりあり西のむやくの閑路を
くくあり東く 境を築て秋田よりく
色く 海北よりくく浪舟入るみ
はく 江の縦横一里よりあり伊
相澤くくくひして又異るあり相澤は
あう 如く象浮いづくくく 象
はく 中くみとくくく 地勢魂をと
や くれくく

象浮くも 雨く 子施り 移り 象

是より雨申
花坊佛は
娘をいと帝衣
尺牘双鳥を
月と草薙を
とある

汐野や鶴はふねきて海原し

象乳

象乳や料理何ふ神あま

いづむの商人傳耳

正長ののらや戸板とやあてり夕侍

岩よと離鳩の巣とよみあま

波とよみあきありそやみさこの巣

酒田の余波日と重て北陸なるの雪と

空を遠くの舟といふ船といふいさしめて

加賀の府より百世里とゆの嵐の道

とよみとよきと浪はの地とよみのとびて

船中のまつゆりの舟と到るはる九

日暑温の雪よ神とるややう病

あふりこもよみとよみ

又月や六りし帝の親よい知す

荒海や佐海よよとるふ天海

今りの親しとるふ子とよみとるふ

みよとるふと北國への難ふを越してつ

ふれ竹のそと枕よりきてあまらるよ一

同宿して雲のすくもあまの女をさう二人

荒海や言
の月を越
とるふ親

斗とさしを年老へる所の子あり
と交て物置すらよよけに誹るの
吾新にともおの拙女或伊勢系
ますりとして片道して母のこのま
てにすのちをこころにいとやわ
まをまこ、そゆることせむも
のころうけけりたをたのむるに
のよのやあかみへうらたしけり
もすい整らぬの業固いころに
とおきよさしと入してあしと
と

まよふこころにむくひてりまき
旅夜ありとあきりるまきと
くせひるさしとわかれとわかれ
ひけり夜のしらけとわかれと
くせひるさしとわかれとわかれ
まよふすは原のしらけとわかれ
くせひるさしとわかれとわかれ
人のりりすまわつてりし神明の
加賀よりうらみかきとわかれ
てあしとわかれとわかれとわかれ

杜若解歌
凡の疾
日暮の樹
挽歌の鳥
雲
又地理
美穂必更
為山廻日
初況
合初
宿

清秋望不極
遠水兼天浮
孤城隱霧深
美穂風更尚
山迫日初沈
獨鶴歸何晚
春鴉已滿林

秋涼 子母のひげの白茄子

途中吟

何れと日ハ難をもあまの風

山杉とふあし

さるしきみわさねの秋

此の太田の神社は詣末置る甲彈の

切あり往昔原氏より属き 対美羽

よりありき 孫さるわらも平士の

ものよあし寸目社より吹返り きて三葉

うさのりりもの金とちりとの龍

の形 寺のま 討死のほ 本業義

仲系女よきしては社よあしは付り

植の流るりの伝き 事たあのは

くも縁紀りみり

正んしやる甲のもありき

山中の温泉よりりる 白根の山根

りみるしそらむたの山陰に観音堂

ありあ山の法皇三十三の聖札を

きさるひしてなだ並大悲の像を安置し

るひて那谷と名付るよとわ那智谷組

久米の助
鳥を能く
妖
人との故

蟬折の故事

龍の別平
飛一見南
翔子當留
館我當帰
故郷

の二つともちうらやましくも奇石さ
くよ古松植るくして萱ゆきの小堂
岩のとろし生りくるとお徳の土地し

石山より石より山
温泉は俗す其切有明り次と
山中や葉いきぬぬ湯の白

何とくもする物い久米の物とていさ
た山重くしりぬ父誹語を好く浴の
貞堂のの草のむり一夏も草りし
此風雅く存しゆのこして浴の物て貞

徳の門人とするて世をさる功名の
は此一村判詞の料を請ふこと今又
むり一後とるりぬ

昔良の腹を痛て伊勢の國中の時
とらふらりあはを先まておし
りくしてきりれ然も昔良の事

とちまむしりりもの事一秋もの
うらみ隻鳥のわられて雪よまら
うらみ

今日よりやまはゆきし雪の

大聖持持の城外金昌寺よりよきなりとて
狂加賀の地しるらるゝあのおはさ
泊て

秋風をゆてふら雲よりとて
夕暮す一木の影ありて
て食堂へ入りて
卒して暮らよ
も秋風をゆてふら雲よりとて

おきぬ庭中の柳をよみ
夕暮す一木の影ありて
て食堂へ入りて
卒して暮らよ
も秋風をゆてふら雲よりとて

○無用の指き
世に世に
用と指せり

丸岡天龍寺の古老古き因り

播磨守の
夏は天孫一指
歌の祿の如く
をよめし

又金洞の如枝とく節のりりるり
送しとせはばよこさしといふ
風来はよすといふしおとあ
れまの他とるとゆゆ今既あふ
て

物かをぬりりく余はゆ

五十七山より入て永平寺を礼す道え
禪師の由事也邦機子里を避てりる
山陰より詔よめし
有とりや

須賀河の字
前めい全さ

福井ハ三里計りぬと夕飯をてめて
出るきりり水の路をりり
等哉とち古き隠さるしつ連のく
りり江戸より事りて予を存ぬと十と
きぬりりいりり老をいびてあやわ
将死るるよやとくも存存といま
な命しとていりり市巾ひる
うりり入てあやりのめ家より夕飯を
ちりりいりりりりりりりりりりり
らそよいりりりりりりりりりりりり

門を拓と備へまあし女の出てこく
がらわらうあふなるの血をよもあは
はあはうらうらうらうらうらうら
し申あしと等あくとこいれあ妻
るくしととさくさくおあうら
こまこころあ結はははちやうて
ひてそのあうらうらうらうらうら
つらうらあうらうらうらうらうら
昔よとととととととととととと
路の枝あしとととととととととと

こころしては那うさあはらあは
橋よあはうてははのや曲ははは
りりあうの深をこて河原岸よは
はははははははははははははは
いのうたれしとの清り言よは
その夜月おほしあすのあはあ
るきよもやとくと越路のあはは
の夜暗よりりかきと何ととと
すあはははははははははははは
仲哀天皇の清廟也社頭神さひて

松の木の河の月ののり入きさらおきく
の白の霜のよあらうきく 往昔おの
二世の上人大致發起のりなりてころ
うき草よまじし石よらるじ泥岸を
けころきてくま宿世馬のねる 古例
今よきしす神前よまじしきりひあ
さよまじしおののちおきくはるま
のころりるる

月はくきくきくきくきくきく
十五の亭のよのけよきくきくきく
きくきく

名月わの國日私定るる

十六日そそ雲かくはるきくきくきく
ろりんと種のはるきくきくきく海よ
七里もの天をほきくきくきく破るお
竹のさるよきくきくきくきくきくきく
あきしきくきくきくきくきくきく
あきしきくきくきくきくきくきく
きくきくきくきくきくきくきくきく
飲酒をのりきくきくきくきくきく
きくきくきくきく

高しきや海へよりうらむる浪の如
浪のさかす思ふにやうらむる舟の
其日のうらむる一筆載り一筆と
さしきしはまはす
落道にほみるともくおむくひして
のうらむる舟のさかすにうらむる
大塩の庄より入る善く長も仔細よ
まかり合知入るにやうらむる如行
うらむる入集る前川子刑は文字を
みとてうらむるにやうらむる

後生ものものありあうらむる且
思ふにやうらむる舟のさかすに
うらむるにやうらむる舟のさかす
にやうらむる舟のさかすにやうらむる

松の

あうらむる

おくれむる乃終

天皇寫

蕉門正院物語

吸麝の尾

○竊北枝うもまに君々并秋風の匂語
よせ殿のあぢあぢを巻て秋のほまき城
くふりお枝う洋くく旅馬くくて夜すがら
の物語くあらうのう句よはつてつと

ありくくくさくくくくくくくくくくくく
北枝雞じくくくくくくくくくくくくくく
一二三のささくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

昔の神よりして、幸ふおとよ
なうをまけぬき、春のゆりし
たはせしとこふ、すはちのゆりし
の廣うねいとし、いひしよ
さゆらう、集めて世おちりて
るもく、ゆるれぬ、おのゆりし
たり、おのゆりし、おのゆりし
は、おのゆりし、おのゆりし
も、おのゆりし、おのゆりし
を、おのゆりし、おのゆりし

おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし
おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし
おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし
おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし

○おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし

おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし
おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし
おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし
おのゆりし、おのゆりし、おのゆりし

苦糸をたすけなるとしきりしむる時こそ三睡
けしむる時こそ神おりき綴子の花着
あのおろし引くさう移しむるさう
きつとく水懸りのゆき際つゞきして流
るりつく枝をちりしに夢良とゆき飛水
て行くごとくもあしぢきと筆跡をみん
とらよ日行よと腹あしきまふあや
況や特掃くしちりしりきまぬあ
て露とりよるしりてはるおりの
あろりよとよ旅と酒生のまつるお

月をこころに集らこきてさむらひさ
大和路よかして負くしむるさ
仲り水永き日影よとちりし
何ぐしの宿ししとまふるし
妻よいらしむる野山よとちりし
あつとくも似るらむと行あひさ
らむの垣よ敷草のさあるか
たつとくもさむらひさ
くくしむるしおろしとちりし
くくしむるしおろしとちりし

おはらぬとてしつゝいひ旅の葉花と
いふに

○翁古人の句彈并稻妻の吟

舟のまよふとてあつた痛もあつたし旅のた
こはらの書ははむらりたつこつてあつた
おうらむとていへに稻妻のたつた
こつてあつたつていへに
おつらむとていへに稲妻のたつた
まよふとてあつたつていへに稲妻のたつた
つてあつたつていへに

こつてあつたつていへに稲妻のたつた
まよふとてあつたつていへに稲妻のたつた

○翁古人の句彈并稻妻の吟

舟のまよふとてあつた痛もあつたし旅のた
こはらの書ははむらりたつこつてあつた
おうらむとていへに稻妻のたつた
こつてあつたつていへに
おつらむとていへに稲妻のたつた
まよふとてあつたつていへに稲妻のたつた
つてあつたつていへに

ましよの露の草塚のふらふら
 るる風のはらばら
 こく權よあつらふ
 かのくすのまゝのまゝ
 ちびりたつた
 かわ何のあつた
 るよあつた
 おのよあつた

書がなほ
 おのよあつた

海をくぼかす
 並樹の古れお
 あつた
 こころ
 何ぞ
 笑み
 眠濃
 ふれ人
 きおく
 こころ

を誓すよのの紐の下の眼をみれば
のたろしお昔のころに松原の神を
乞ふとちしを神としやめといひ
今出日の柳をさくさくして遠よひ
さよめらふ夢を羽の養ふよ
さよめをむりしをま絶ふら
さよハ珍の音をちり嵐の皮を
さよとして朝夕を海の深し
津坊をさくさくさくさくさく
あらきしちちちちちちちち

ひらひらひらの飯のいと白く
赤い飯を人の食をさくさく
赤い飯をしたくさくさくさく
見慣れたくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
ぬを相国さくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
義をさくさくさくさくさく
茶碗をさくさくさくさく

かやの着のしゆしめく廊の夢を風
強ふかきて老の杖さしめつとよ
み又その中よあしこおのころたうし
きてよあしめめいそ書司を絵と
らんと清水しりひりしとふと念ふ
首よ叩して白紙しこの飯を味を欺
ま咽よ甘あさ海すうやし實に世の目
とあしんくしよあめあしたあかす
極りて出らるりより清切のくせし
うむらじしあめあはむらき御折しよの

みてとよしりあししり清切
美い絵ひびくさして矢三をこし
うらな手拙なうらしめとこし
うませよ清のあしんくしりよあ
の扱るしりあしりあしりあしり
城しとよしりあしりあしりあしり
あしんくしりあしりあしりあしり
とがふらあしりあしりあしりあしり
清の計しりあしりあしりあしり
むあしりあしりあしりあしり

○甚角那坡下句を聞ふ

炭俵探の時甚角が

我の尻尾上の松よさるひん
と葉して多敷くしこの白らけいん
やと聞ふを聞え何なるいん
たい社のものいん
一點のやちとを角よりい
て笑致し定せ

○我仲まのはは是并甚角彼客

く歳を極し

と角家の孫よこはまの
送義仲もくし悪會より大津の智月
ちさけあるたりと路通のふ興と
ふく世一ぬ家終焉ちのさびら
くさる我よつらしゆらまの
るふ火も門人路通と跡ぶひ
席し男もあはれまの
そまはるくし知月乙は
連中しとるしむと角答るら
直が飛ゆるくしとさしを
可

もとふれは 砦あはの 鏡香とるもすし
としすげあく 帝のすもあざむと 路通
智月りなりしと のびてし 使しと 帝
よとさうし 會送の徒 甲十餘人し 山
も 壁はして 足どりよ 路通 持と 押し
くねて 大津の 依家と ころし び 山
よおろし ころし 其角 又 其 基を 踏
越て 牛馬の 袖ふる ころし あり げし 山
短剣と ぬし 拿て 依家よ 立むら 山
支那 又 草 踏り ころし 山 酒堂 山

あは 依家よ 踏く 其角 又 洞より 發
し ころし 乳虎の ぬく 吾 湖中し 山
人 ころし ころし 天市の 城府 ころし 山
す 押 山 越し 日布 踏 あり 日 年の 人 其
物 ころし 山 ころし ころし 橋を ころし 山
ころし 山 ころし ころし ころし ころし 大
津 登の 山 穴し ころし ころし 牛の 延し 山
上 撃く ころし ころし ころし 山 ころし 山
芽 ころし 山 ころし 山 治 山 ころし 山 山 山
す あり ころし 山 削 かけ ころし 山 山 山 山

とくし汝等とくしつての物とてし
たかたるし忠登の子と如し彼等腕の
中これとたつていふ家登の馬つてまじり
たつてし

○其角三井ちよと登し二二章

法廷事終りて正考酒巻さぶ亭り
遊子ある夕大津の人らよしとるをたし
三井ちよと登しとよとあつて深田の夕日ら
すうと張とて棠津もまやちくく煙の
中へ腕うとまふりくるまは白梅は

花よと一むいといと入いしこのちの晩鐘
とる一とていほるまのいといといとい
ちまなく立てし船り船の跡よぞら
山落るふりて遠まよ極心燈皮
何れも可消悲さうちすやみてつたや
く山にまふ

とくしとくし三井の二玉やみあま
たつとあつて登樓しあつて
たつとあつてあつて
は二章のちよと登し二二章
三三

さういふおもしろいものも、
しやうのふしの川を感して、
めき強よしつゝ、
やて義仲もわらちりし、
今もたそよに、
絵もんといふ

○支考還俗

支考人となり、他へまゐるり、
刻めさるゝ工夫を一点の中より、
は俳諧の山枝りありて、

おもしろいもの人を、
しやうめは許六と、
みしはるる、
こ下の俳諧も、
久通もあり、
たらく、
そりし、
蓬の、
と、

○支考 福寿草の花より

あつたまのを給ふまきと生てたおく。
もし一はまよるや一あ一輪之まけふ
ちては一ぼめは次の茎うひ一さうの
次又整と經支介つら一觀望一
人間の子孫のいし一氣風力ありの
如し一水の流割の色さひ一さうこ
のまよつくおるく一久しきまおと
さうめづかしく一氣能滞つら一もあふ
づし文章も付ふまじ一まぶま名坊
のあま前りして一まじく一まき神一師のま

まひるまじのまあまぶまつ人まわい
まよし往まあま一解まかつ三世の
変化まあまんと頻りく一おもひ三と
○支考非亮へま通兼乙由の句評
支考金城の非亮へま通きらに今手
とま濃の山家まらま一東西ままの風
流まいあす

まよまらまあま名ま一こまよの風
ちまづまの歌まあま一まあま
くまあま一ままら一ままのし由のま

又海より

かりし海よりよき月
申事候かきつる手づよ思老も切に
り及候後より風狂もあつたまの
よそはきり理座と沈み海すゝめおほ
かり成吟一向おほひうけち候定めて
志操の事しるし申事候もん
りあり

○支考八夕書の字を

支考八夕書の集を撰むらん

のよりの探訪のしるし御一冊に
八夕書といふ句なりしを
いふも後にもちし書ありし
かゝりし

海にふかきと月のかげ
とさしつゝの句も御一冊に
るものよりの句も御一冊に
とそのおほきなりし

水より一編汲りし

水白と集りし

かいたおどろかすか同AH書
りて王手飛車のあつた
分退を強て取る思あつた
たあつて

○支考童平と
やう

支考美濃のあつた
り格よふ
ついで
支考

支考時
名所の法
雅ら
平く申
ら
子
る

かしの叢のちのびのよもぢらほつ杖の
ひかしし子よのしと笑らうしふる梅を
河のゆく二月の春をのせ井をさるし志水
院へかこりていに南帝の昔の
らふとてしは親の海に海をいりし
日もくらくるく木の洞よりくれ谷の
水音むせあらく支た童平たちる
ひて石とよとらうちらくれも同者の
来て人かよおむ花のしつりけり
とんどの向く支考院よあつて鼓白

まじらうらうらうらうらうの絶唱
まほつちゆしわくしとくよよ音なる
肩よとゆし言いぬしと盗人かゆく
るく市山と粧して行脚の奴とい
すれれいの吟今もく子句なりあく
まじらばまたしじ物をもいし支考ら
ち志又くし童平ら背中よとこいし
あがりしともらうらうらあしと口よ
掩ひてしとさくしと

○支考乙内り附句をいせり

團友と評者として支考夢林舎と
僅ものさしを黙して言ひ

老僧の顔と伴隙の足さき

さよふありこの句は印する

と冬獲よ冷しいろよ新教の

会ありて扱きも句をこぞ

一をぶらうひしてまひひ出せ

一表ふりりら

ゆへにうしろの板をりみ

さよふありとまふたあ

老僧の顔と伴隙の足さき

さけしやまの句は

さよふありとまふたあ

さよふありとまふたあ

さよふありとまふたあ

この歌の句は

○後述の句は

よ

惟恐切の句は

よ

ようりれはあはは浄瑠璃のりよりし
て西のりるのりしとすむとすむとすむ
集とふまふ記はふのふまふまふまふ
てあに記りのりふあふ

水やうとふまふふまふふまふ
ふまふふまふふまふふまふ
長いふまふふまふのりふまふ
まふまふのりふまふふまふ
ふまふふまふふまふふまふ
ふまふふまふふまふふまふ
ふまふふまふふまふふまふ
ふまふふまふふまふふまふ

よ祥ふふ記りふあふふふふふふ
集ふふ記すふふふ祥ふふふふふ
ふふふふふふのふふふふふふふ
集とふまふふふふとふふふふふ
ふふふふふふのふふふふふふ

梅のふまふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふ
○惟然かむふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふ

男是元物よりしりて事い
ふくすささるる女ありて女のあは
むくさうりて互にうらも申さなく
しあはは色もほしと物うらまはす
ささるるうらひりかともちかひの
いろよも世うらんうらくさうらほ
し秋のむらにうら女

あよもささるるうらうの文
いほつちし垣垣よあはしけり
しうらうらよあはるる男娘と

あはるるうらうらに物書し女の心
ようたあうら

なら垣あはるるのあはるる

女あしうらあはるるあはるる

あはしうらあはるるあはるる

うらあは

あはるるうらうらあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

そりかくるりさよりにし

○丈草まき支る野水知人石山

よふあか

五郎宗ころし草出して石山にふらしたる
の海にらる水にぶ東のりあやめとぬれを
しよしよしの糧にふらしたる
のいすもくしよしよしよし
しよしよしの水にふらしたる
のいすもくしよしよしよし
のいすもくしよしよしよし

おのころしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよし

清よふ船と観念するにふにめせしはの
まのふしむいほししとなれ痼疾とも
すれわれいふ水とてのいひものぬれ水
神人といふよふ人といふ人といふ人
支考に云名づきの監外と書さるるは
を相きしと能指の名よねとて

○杉内家の喪とてし并支考と
絶交

杉内は蕉心の子とてしよくして敬み
花の計きとていふとていふとていふ職の

魚鳥子責給に記すに毎子といりし中
陰出ころりし勤め長慶とて世に白
塚いとてなむとて支考とて支考とて
彼も芭蕉のぬみよりして風流を
縁とすいふあやまのたせし
在りぬと抑よとてなむとて雨を切
付らしていふとていふとていふとて

○若るさし下とていふとていふとて
若るさしとていふとていふとていふとて
人のふとていふとていふとていふとて

なるす

史邦 心あしんしんあし

善長もしんあし

○野城後り

お城まの事しんあしんあし 浪あし

地あしんあしんあしんあし 野國の地

諸の心しんあしんあし

○野城後り

あしおあしんあしんあし 人の善

しんあしんあしんあし 心あし

るしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

あしんあしんあしんあし 人の

かゝるもて外し人ありて
新のあなをひきてもす
のちのこ
かゝるもて外し人ありて
新のあなをひきてもす
のちのこ

新のあなをひきてもす

かゝるもて外し人ありて
新のあなをひきてもす
のちのこ

かゝるもて外し人ありて
新のあなをひきてもす
のちのこ

新坂ひらきしむの如きめあはし
たのくも鳥さるもむ家の春
世白せしむらあししにむしむるわ水
さけぬしむ

○李由公立塚を築く

李由も許らとむりこめらくぬり物
のさけもなり曰梅廬の風流及笠
塚の進福くらのまいしこむむを笠
と志望のり物入ぬ草さー檜笠
く塚のさし

○許台癒よ病并女子見也

許台もあき蕉もいんくり雀門の
る儀よ得し又音もちちりしよか
こし支えかを探しまのゆはよるよは
病よりあてしよるさあなあー西
しと風流よ問らしこくつよは
風流くしよひの風月ささりて俳
語もま城の万子鳥よ散し許台
り得きしこもよあよさ又万子
いりて奈風をたぬしれと蒲団

かゝる女すまゝに赤子障子よれし
むらゝ眉をぬれ流れて強懐きよ
ていひぬもも蕉心の他はようこの女のわ
らほる酒さささるる万さるる情を白
二云いぬ情あつてもおちつよふ恥妻り
さぶらひよらふしもあはれしこゝろも恥ん
是れ全くらのほごら俳諧のあささ
きゝふ支考らさもして師とすゑんを
七蕉心の他はぬれぬららの涙もぬれあ
まじしきさるししよば投きとと土器

こゝろしきまゝのいふ人三をしんて女子
りあゝふ膏固欠き流して河畑の流る
身いぬ人ふあはれあつてもぬれぬらぬあ
らよも色くうらるる酌とささし兼桂
の心むらゝらやし祥合流よおやん
流る風流の大丈夫ころころ人り
行く情あつたよふこの病てしんて
命いく程もぬれぬらら長別の初と流
しんてしんて

○下子あはれしこゝろあはれしこゝろ

しこ酒壺ら籠りひめおけこぬ死な
むふらこむり生涯にひまをのりりむ
しが酒壺ならぬりてより娘暮か
らおろこつらけの菫よこよら日月
たしおつにみまのこ人むりし洛の風
律ささしむるむせし満のたつたよ
うみおこるあのおのら路よ待ておの
ちの能くはるむむむむむむむむむ
とむむむむむむむむむむむむむ

○鬼母のむらさきむらさきむらさきむらさき

難波の湯に上咽湯し籠りあしの紫の
びよむらさき床の蓮むむむむむむ
一女のむらさきむらさきむらさき今は鬼
母のむらさき朝夕の種むむむむむ
昔も花浴るむらさきむらさきむらさき
むらさきむらさきむらさきむらさき
むらさきむらさきむらさきむらさき
父ま甲の棠のむらさきむらさきむらさき
むらさきむらさきむらさきむらさき
むらさきむらさきむらさきむらさき
むらさきむらさきむらさきむらさき

まふまふしからひてまふまふしからひて
まふまふし車馬まふまふしからひて
まふまふししるしるしるしるしるしるし
まふまふししるしるしるしるしるしるし
まふまふししるしるしるしるしるしるし
まふまふししるしるしるしるしるしるし
まふまふししるしるしるしるしるしるし
まふまふししるしるしるしるしるしるし
まふまふししるしるしるしるしるしるし
まふまふししるしるしるしるしるしるし

ひめとまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふ

らるるよの道とあるひとも川竹の流
の流女をばらちて孝もあはし
かたふかしあしお塔もあはすよおたふ
くはあしあお塔もあはすよおたふ
しくおをあはし路通まの魂を
こおよもく女お箱くおをあはし
すあはしあしあはしあはしあはし
のあしあはしあはしあはしあはし
まはしあはしあはしあはしあはし
への行儀のあはしあはしあはし

かみてあはしあはしあはしあはし
くあはしあはしあはしあはしあはし
のあはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはし

○涼鬼変記

涼鬼をまはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはし

ふ涼鬼——うりの愛代よけいこいお
きいて世よりくまのあまのいもよの
の丘のし涼鬼に驚くまほりける
と丘の山よりよきひりてまほりける
土まよたしきよに招ひらるる
あめや雨時——夕つりさくら
あく出ありてい洋盤よおしうの
盤の照よ及西國よ多し
みづも悲しうしう洋盤の
うらむちの盤のちよ三白尺

大なるいもよのあまのいもよの
に時よいあまよい日の光よ
射るあまよいあまのいもよの
ふしあまのい多し丘を彼よけつよ
し即て人よすくよいあまのい
物くまのいあまのい

○涼鬼辭せ

涼鬼病のまじつこいとおこいと哀
ちよ門人抱くちちちちちちちち
の園友よ辭せの句ちちちちちち

すおもひてみ即ち卒なまの句よおそて
付句をぶつて昔村りとあしと念めたる
いさすの雅きと後のみくりとくらふ
こころ

おしおの白ゆふとくしめ 見新

車ののすのきさうりの警乙由

へり句ふれとくしめ

宵崗ふきく原平のた謬全

又一句ゆふとくしめ

路中て思ふ何城の裾全

見新吾と昔ちいし

わたりいたすゆふとくしめいはいあや

ふり句あしとくしめいはいあや

又

珊瑚珠のたぬて飛たよあしとくしめ

門くしめと鮫の臆病乙由

こころあふの息よとくしめあしねばいんあ

はよ閉てるとあし昔句昔きうらふあ付句

昔あよふよとあしよかして海わしとくし

終

自叙

むりしむらの葛嵐は吹風録と信定
の浪身を存しちきりしおとし進海
のおぼろげに寝て洛のまをえし
けとよよふ東海のとろし流と増さけ
つろしむも板よりしとこちのち城の
都岡にありて都のまを城のまを
まよふに守勢よりおぼろけのまを
まよふに西司水城のまを流と補
ふり一管流の世に記しとあてら

ふとらりしとらりしとらりしと
川のちいさなまをりしとらりしがま
るの反故よりしとらりしとらりし
かじあしあしとらりしとらりしと
のゆるははゆるはとらりしとらりし
れのとらりしとらりしとらりしと
の記記おとらりしとらりしとらりし
りしとらりしとらりしとらりしと

寛文五年九月

おぼろげ 吹風録

中川

露伴

隅田川と西川とを合流し江戸川と東川
 とを合流す。その東海に二つの川の間に
 水がたまり、南に流れて、江戸川に合流す。江戸川
 中川と
 合流す。隅田川の上流の荒川の水と、
 谷あきあきと、江戸川の中流の
 利根川の水と、川俣あきあきと、
 て、二水が合流す。中川と、おめて中

川の名もなほと申して海よりくもるなり。
あり垣とく平葦と流るるありの
りてふく原と云ふ海路と世なす
もちふたば。海國なるも穩りありし
音もさうし。海のゆく回まわりなす淵も
まへく。たゞい落とく。流る。緩く
とらる。特とり子こ本もとお葉は子こ六む間まも
上うつつ。縁えりり股か酒さをを下くだりりままののままひひ
ささ程ほどいいくくももああくく浪なみのの二に十じ二に曲まが
おおよよろろききももああくく水みづ急いそくく漫まるる。

流急く激みて。河のなをも。行解禁禁廻
よ極む。よのく。激湍峭壁のまのま
いいききりりのの西にしのの屋やしし東とうにに持もちづづくく葦あし
湾わん蘆ろ河か流りゅうるるややらら坂さかよよかかしし或あるも
和平朗暢へいれいりやうちやう或あるも蕭散閑曠しやうさんかんくわう凡たゞよよこ
て凡たゞるるままじじぶぶのの款くわんせせくく。ああままつつしし。氣き
有あるる新あらた器きああるるここのの名な區くのの水みづ流りゅうるるををて
河かのの溝こうのの如ごとく。夏なつのの浮う菰こも長なが藻そう
僅わずかくく舟ふね路ぢをを呼よびびののままののまま。ままくく言ことふ
くく是こゝののままののまま。曲まがのの後あとりり下くだ。

あつ戸のこま月も、この壺とくしくお
り西よりくる安き月お織くして玉
鉤環をうんと欲するの勢ありて。其
ま懐きして廻きる一帯のるに水より言
まきこま一杖がほごなぐり、上平らうり
下漬えて、重葎の根組を日この連騎
よほらせり。春日おの夏をいさゝ
らす。菊趾の冬をりち、うりに身を設
りんのは其甲の奢りの釣基をさ
すし。立石およりおわりのあゝ。一時閑

静、西なる蒲條、志の更令船の相繼ひて
駢ひつ、櫓あり、帆と漕きする、河
中り笑ひ語りて、わらう、を舟を向と
ぶ、いと長閑けと。西袋を流大り、江戸
より匂入り、東岸やうり、揚を閑け
提や、遠く、見、隠きの中、海をとも
りて、河も幅闊う、綿を白く、風まのこ
ふ、簾立ちて、行菰産村、夏、竹の暮く
輝く、が渚、深の抜り、時、南葉
訊と列りて、水も笑ひ葉も囁く、何

綾豆の折と重
二加賀國を南
ふゆも卯花く
かしの降り後
くそ昔も乳
一ち一ちりそ
りそそしそあ
るををあし

ふらふらパン鴨の飛び出てし一度の
翅軽く沖してきつて復還つて蘆
荻の中へ潜んで寂として水と没
すふらんどおひろと。室下も南
字ありて密林甲もききうぬぬを
聖し下へ西へ聖天堂をさへて林刹
二三間とあり。卯の花をさへし卯月
の初し後ちひ番傘の昔なるが行
き菅笠の白さう行く平井橋の小
長き子望むよ、杜鵑のいとあも首

とみひひ
ふい又橋を
こををを

らあふりしき眺めつむびひ好し。橋の下
東おきふ疎ふ蔭茂りて物影ふ
るたるり船大工が鐺鑿金の音も
懐りしよ。かゝる桶前六折口あこま
み蓬寒燈籠の夜もやもる釣者の
舟の二三のりあふりぶるよ、蘆のた
沈として水のたけ驚こしよか
し。織橋をさへしよこして
なま冬の水も錯煉瓦の煙の雲色も
好し。鐵橋の下荒子、瓦焼く烟流

枕草の紙抄

いよゝゝあゝいよゝゝ

法師乃こゝをいとおとこ女乃こゝをい
福よゝゝあゝいよゝゝあまのりあゝい

いよゝゝ

あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ
あゝいよゝゝあゝいよゝゝあゝいよゝゝ

あゝいよゝゝあゝいよゝゝ

市

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

海

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

海

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

集の

あら^るのあら^る あら^るのあら^る あら^るのあら^る
いは^るのいは^る いは^るのいは^る いは^るのいは^る
うは^るのうは^る うは^るのうは^る うは^るのうは^る
えは^るのえは^る えは^るのえは^る えは^るのえは^る
おは^るのおは^る おは^るのおは^る おは^るのおは^る

集の

古今集 古今撰

集の

あら^るのあら^る あら^るのあら^る あら^るのあら^る
いは^るのいは^る いは^るのいは^る いは^るのいは^る
うは^るのうは^る うは^るのうは^る うは^るのうは^る
えは^るのえは^る えは^るのえは^る えは^るのえは^る
おは^るのおは^る おは^るのおは^る おは^るのおは^る
あら^るのあら^る あら^るのあら^る あら^るのあら^る
いは^るのいは^る いは^るのいは^る いは^るのいは^る
うは^るのうは^る うは^るのうは^る うは^るのうは^る
えは^るのえは^る えは^るのえは^る えは^るのえは^る
おは^るのおは^る おは^るのおは^る おは^るのおは^る

冬に... ちむかい... ちむかい...
あし

あしむいしちむかい

いしむいしちむかい 男女の甲

井

あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...

あしむいしちむかい 井... 井... のあ

あしむいし

あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...

あしむいし

あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...
あしむいしちむかい... 井... 井... 井...

あしむいし

あふのら〜川なるのら〜川なる七浦
あ〜ら七浦〜川なる七浦〜川なる
う〜

寺

はぶさ〜川なるのら〜川なる七浦
のら〜川なるのら〜川なる七浦
とれあるのら〜川なる七浦

おら〜川なる

徑をうらなるのら〜川なる七浦
女あ〜川なるのら〜川なる七浦

固ゆつり〜川なるのら〜川なる七浦
が枝こもれ〜川なるのら〜川なる七浦
け〜川なるのら〜川なる七浦

野

名野〜川なるのら〜川なる七浦
るや〜川なるのら〜川なる七浦
を〜川なるのら〜川なる七浦
あ〜川なるのら〜川なる七浦
こ〜川なるのら〜川なる七浦

あ〜川なる

Handwritten text in cursive script on the left page, with several words underlined in red ink. The text is written vertically from top to bottom.

神

か〜しあ (あ) ちあ (あ) ちあ (あ)

神

あ (あ) あ (あ)

あ (あ) あ (あ) あ (あ) あ (あ)

神

あ (あ) あ (あ) あ (あ) あ (あ) あ (あ) あ (あ)

秋よにあはれむと費いしは花のよはに
ゆく〜と久〜う〜か〜
まりの神とあり〜

木乃花と

梅乃く〜と〜も〜う〜ぞい梅乃に花び
らおわさ〜枝いろ〜ま〜が枝わろ〜ては
ま〜る〜花乃に花を〜あ〜く〜色〜が〜
ま〜い〜と〜め〜と〜う〜れ花にまな
と〜り〜て〜あ〜と〜な〜ら〜ど〜は〜く〜は〜乃〜お〜り〜
う〜花〜の〜陰〜〜と〜花〜ら〜して〜は〜ら〜

ら〜と〜ら〜〜お〜と〜ら〜た〜と〜と〜
の〜あ〜り〜ち〜ら〜ま〜あ〜わ〜〜乃〜花〜と〜な
ど〜る〜あ〜わ〜さ〜ね〜あ〜よ〜い〜と〜は〜ろ〜く〜
こ〜ろ〜お〜り〜〜れ〜あ〜ま〜ら〜乃〜く〜よ
と〜ら〜ま〜と〜〜と〜な〜ら〜〜と〜ま〜ら〜ち
ぞ〜あ〜と〜〜か〜ひ〜〜と〜あり〜〜月つきの
は〜と〜のつき乃は〜と〜ち〜ら〜の〜は
ち〜は〜乃〜く〜あ〜ま〜ま〜と〜花の〜と〜ろ
く〜あ〜〜と〜る〜乃〜く〜〜と〜と〜
る〜と〜ら〜ふ〜く〜は〜あ〜と〜と〜な〜り〜

花の中は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は

花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は
花の心は花の心は花の心は花の心は

らたれしむるまゝにたふたり
をたふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり

らたれしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり

本

らたれしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり
たふたりしむるまゝにたふたり

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a form of shorthand, consisting of approximately 12 lines of notation.

草一

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page, consisting of approximately 12 lines of notation.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines across the page. The characters are dense and interconnected, characteristic of shorthand systems. The script is written in dark ink on aged, yellowish paper.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines across the page. The characters are dense and interconnected, characteristic of shorthand systems. The script is written in dark ink on aged, yellowish paper.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 14 lines of dense cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 14 lines of dense cursive writing.

あまのこころをいかにかきとめて
名づくるにけりけりけりけりけり
よにまかすもよにまかすもよに
ぬとけりけりけりけりけりけり
さちくおのりけりけりけりけり
おのりけりけりけりけりけり
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて

あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて
あまのこころをいかにかきとめて

はらびいちりくして校のちなるよりいひ
うきふらふらうきふらふらうきふらふらう
あつたつたつたつたつたつたつたつたつた
あつたつたつたつたつたつたつたつたつた

越路子旅行一 條

建部涼袋

おのれ若りありしより旅行をよくして、多く
の旅行しつてはつた。卯月をうけて越
路の旅行してはつた。世に面白く思ふ
たものはある。きつは其所のちをそとを
てはつた。いふに、きつてはつた。いふに、
書附けはつた。彌生末の六日、いふに、
いふに、伴人、いふに、いふに、我も率
てて出羽の五久保田と、いふに、越の海

る一と通りて行く旅路も出づける。此之
侯田も去し舟よりりききて、雪のふく積り
たふた悔ぶらもあふび、その國よりり居
りしるり。さてその日と秋田のさるみと
莊の五府もたふ。ゆふれが伴人の知る
山寺のあふりしと、道もあらたふを
さひりて往きて、その山寺も矢もける。何
ぞか申しけるなまあり。同じ陸奥の中
下も此陰にあらじと雪降るふれきむ
彌生のおもあふ消えかして、侍る雪の俄

し月の中の程より、見らるうちに消後り
きば、先梅の咲ぬて、いふ好し。そもく長月
ぞうせり、雪岩の絶ゆるてあれくお續
きてしぐらよ、ゆふれを、晴好き日の
み続きて、風もふらふ、いとものぞくお
はるを、は、是らの國よりあり。さて柳も
いと浅雪して萌出で、さる赤よ、あをハ
重の白きも咲出つ、さる雪も多し、多く
る。此雪よば、その國には田打橋とらふ
り。此木の咲くをみて、田打返す時、ま

とすれは爾ら言入。きよは彼御守を、
高うらまの遠よりさ有りて、其を入りて
行く所有り。言は高山は是れもさぞ、
此ありりる峰土のみ運りて、細き流の
あふり土物お後せり。まどりは、青い
芝生のいとゆるかき生也ぞ、野は陽光
のおちきくらひきたに、山の根方お露降り
て、南うけくる山の遠り水は、殊更り
暖有り。此頃よりけりて、くしく厩も撃
き心籠め、馬共をば放ちるに、小馬

をお連きて、珍らけり大野の立遊
ぶ様こそ面白き。扱きなりと思ふ林登
よ、かすうら山里の付るが、塔山にけり
く、家ありは、そのかきお倒れり、
葉垣ふどは、新らしく締直り、
田島の業もせき時ありや、のどやう
さうらり、日新は、思ひもの旬
みて、何よかあらむ鼻ありて、歌ふり
り。又家鳥鶏を、いと麗しく走り、
垂尾をりきて、屋の上を登りて、書の時

を告ぐくくや羽根うちくきてふり出
てく鳴くなむ心かげるりの野鳥のりどり雉子は、
木の芽のお煙りく木の井の隠れして是
をあらざとほろくお鳴りて鳴く声のゆり
ゆかりのなぐふ平もさげれど、音の中は
簾翳りと百日中埋れみて伝りしを、か
くちるも消えてワギくも長閑けく、殊更
心めのわ旅は侍り、行く先も京みやこなれ
ば、是を見彼にみゆくの、守る白き花
覚ゆるるむ。叔御寺の冬も着けだ

く氣もけらぐんお静まりて見ゆるに
鐘なむお鳴すまは、寺の傍り立ちて
伝りに、啄木鳥より、小鳥の來て、かの鐘
おつ木をば、何人食らむとやこちくと
つきみるぐいと寂しい。格子の紙の甚く
破れて伝るより隈か見ゆるに、見れば
老いける泣の、女の方り針袋を開きて
糸のどたぐあは物縫ふやあらむ。
又南ぞくこの格子の目には、十ばの字なる
童の札よ向ひて手習ふと見ゆるら、字を

さる赤心遣りけしむるもいと切なり
—は、草鞋なども是結あひだをとも海きして
さらば今飛とききし打止がりし也。さる河に
主をゆりもあひして、二形く懸た—たまふ
其日もまぶし高かり—かな、少—体ひてきて
上の山—さりと見えたる海をいと長く、山を
高く—ぬる言も皆消えて、躑躅つとむを
蒼あみ—は—椿も色濃く咲き—るは
子。又まゝ柴もは萎るる花もを靴と取附け
たらむ様—なすが、此れも彼あり—を

まんさくは、
整年の時を
よく咲く花
りて、此を
萬作の意に
て万作とい
ふなり

咲中—の—他の國—に見えしものにて。
名を如何—とてふお外—く—向—は、
此道—して—まんさくといふ、此花を正月
さるふきは、雪氷の中より斯く—はやく—
咲出つ—なりよ。さる今思へば、先まづ咲とい
ふ—も—あんと—は—さる—也。又
片栗かたごといふ草の花を葉はまで、是も雪の下
りり咲く—なりよ。是をいと盛さかまて、許ゆる多打
亂みだり。禁かぎる—は、海—作しりありあり
上げて候ふ—なりが、峰—つ—るに、峰

よ上り下りと面白く鳴くなり。日よ八方に
なれば事務深く立旦りと、杉の色なども甚
曇なり。入相の鐘を打鳴すべく、山を下りと
夕食をど食ぶ。さて此寺のまも近き程
に旅行して、京に登りおけすとゆゆ。よま
伴をいど、今七百とありに後水がむこの
たまふよ、此所は唯一絶なりと退出ぬ
又主の今日 甘瀉の著きたるもいん、さら
ば斯くり小寺の往きてたぬとて、文な
ど附けてたまはるよ、いと珍ううとて出

つぬ。七日も長閑かゝて、海の面も和ま
あつり、舟ごとく多く浮のみて侍るを見
つ、いと面白き山路を行く、甘瀉の参
り著けは、ならひして侍る御寺をなむ巻
りて、そふもたうす。又の日は留り居て、
甘瀉の江よ舟浮けて遊び歩まける。櫻
は今よ盛りとて、おの気の上満くと極め
るなごり、お花など咲攪りと侍り。
桜をちる子なれど、梅の花も異所な
此おろはひて見むおもなし。鳥海とて

家鴨の雨折
うら 似つかは

山ちいとふく聲やきし、言もまじい白く
て張きし、母にきこりにはそいと浅き
が波風の畏も付らん、多くのまじり
そかのもこりこりこり、出で、見おの付
るに、躑躅を磯河の候直りて、桜も交
りて付る。松をまじり曲りも直きも、
の気色もなむ。餘り、長閑き日なりしが、
申の時にうりより、打早りと、
出で、付るも、舟もな、甘満寺の庭邊
と、溝宮をてお上りつ、寺の松まじりて

りて入るに、花が甚く散る。替り
て、晴きも、水は、虹のいとふく山の峯形
映ひて、付るも、夕顔のを、隔て、海
の面も、まじり、言も、な
き。お、まじり、あ、の庭、清ひ、寺
ありて、や、まじり、更、た、風
吹起り、浪、まじり、怒り、碎け、散る、波
の音、まじり、は、河、まじり、さ、え、まじり、
るに、まじり、まじり、まじり、海、の、面、まじり、
日、まじり、まじり、まじり、卯、月、の、一、日、まじり、
八

と、夏衣取出むりぎもあく、雨さ
降まると寒りきよ、此のまの切り
留めしむし、わび、今日行くさる海を
こりき、海へわると退出ける。此のち
いと辛やあ、豊ひと、夜よつと酒田の
濱も甚まきと為る。又の日のいしく濡き
い、衣をあげ、乾して、まよ、留めしむ。
次の日を穴いと好く時よと、温海を温
泉の付る所を通した、横、山、吹の八重
一重をまら、美をほりて、峯も岩もま

今を最中と見え、いぞも学もさく、
又、畦と山の木、植み、途出で、やしく、忍音
とあり、立ちこり、叔行くよ、柳も梨子も、
ありとある、花を咲満ち、さう、樂、い。
ま、遠、い、花、早、さ、あ、直、水、さ、ば、り、よ
なり。今、甲、さ、さ、る、日、を、飛、し、吹、う、そ、り
さる、水、ば、さ、す、ら、は、印、月、の、氣、色、も、付、り、
花とさる、水、ば、り、又、ま、の、氣、色、も、付、り、そ、を
む、牙、ら、さ、さ、の、遠、の、様、り、出、羽、の、國、の
境、何、と、さ、く、廣、の、遠、の、付、り、又

その伴二人がほろほろと歩かば、
行く。名珠の関をこえ、城の原と出
所の隈まで、此所を五里とせよ。山路の
家もなほさす、行くるに、心得すべし。路
こそ細く、草もさしく、木もたぎらぬ。さして
爰を葡萄越とせよ。山なり。雪を深き
所とせよ。違はず。春の雪もさす。降
敷きも付らぬ。かすが、卯月なり。南
南に向ひ、尾上を名残なく消す。巨り
今ぞ、初春の生虫でた。かの此頃、見つ

つかりん、さくの花、片栗の雪かど、田打
揚らむ。心は、又、送満をせり。
一重桜を、漸く、蒼み、なむ、付り。
又、西北、向ひ、尾上の、深き、谷、ま
山、なほ、本立、冬、の、雪、氷、い、ま
だ、消え、ず、海、の、風、な、ど、いと、寒し。行き
と、行くに、葡萄と、山、里、は、付、ひ、と、家
羣、敷、並、み、所、が、な、め、此、所、を、此、邊
り、ま、り、て、雪、の、浅、き、所、を、り、と、て、春、の、気、色
と、い、と、早、き、由、り。ま、り、て、春、の、花、を、扱、交

せし付る、青き葉の花をどし咲続き
多り。又先づはより遊る、はり候
ころふが、彼方此方飛交ひて鳴連し
り。そ日を其あふ居り、四つ水が村止ど
し、國府をさよ、まのえ、まのえ、寶寺
をさよ、さよ、訪づ、ころに八重を、物を
散らぎて付りける。此城の路を、片や
ま、北海をさよ、幾日とく行く所ある
よ、八百日行く海の旅の志、何と詠みけむと
ころらの海邊を詠みしからむ。立後れ

て物の雁がぬる、いと多く飛び連れ、
思ふゆるる、唯れも向ひて行くとも見ゆ。
行くも、真砂路をれが、乾き、水も
甚く踏費く、白波の打ち、つ、磯間
を歩み、さよ、皆さよ、道を暮ひ行く、種
々の色、見の来、寄りて付る、都の
蒼々と、珍む、さよ、きの遅く、水に、堪へて
行く、あんないと口惜し。何と、言ひて付る、舟
中を行く、奇、さよ、山き川、又、舟長とおぼ
しき、家の一人、み、さよ、舟、乗り、て、あり、た、是

此川を新瀉の港より続きを付るが、十餘の里
を隔りし付けぬと、此川水の下にたつて舟
の行くを任すといふと安く熟睡したまふ
うちに暮くるなり、斯く舟に乗らざる旅人
も、おどろしくもなす。何れも浅き川のい
と救きよ、畏きまを付らざる、さうばは是は
なり舟代を承らざるも、乗せしよとせば
いと當らざるなり。是もさうばはゆめ
ぬ怨むとみるが悪くて、己等は是こふも
のをおさるなり、さげのやの舟代を出さる

かり、酒食べん人を食べ、餅食べん人を
食ふべし、彼見よ己共が足こをとと、強
強く踏鳴して、いと疾くも行きて是れ
バ、おつと叫びかけ、心早き旅人なり、
さうばは後よのちもひし舟代も、酒代少し
取りつけ、絵巻を負けしむ、立戻り
て来りし。舟中の川成よ、名めらるるがうら
さやひど、お仰きとおもた、その雀のさく飛
びて鳴くがぶくえんて、心遣りなりと云
ふは、舟長から夢みて、かのやを雀とて

たれよかくさくよりと鳴けども、秋の風は
荻薄の下に隠れて、曉子は一ふつと
面白く鳴くなり。旅人も都方の人な
らば、海客も知りてあつてし。鶯鳴る
る海客のなほ信物もよ申さる。ち
うかりつ。此外おつつけさる。お
しごと、活りてすうすうと慰めて、おほし
起きもして行く。か、唐やれ、川は
あり行けらる。かの港は近きよやあらむ。骨
べの島さる。お夢いともくうりて、穂かど

鷗

ま打亂さき、波のささきと白く浪氣水
くくく、頬白、鶴のひらきの位みみ
鳴くも面白き。夕日のいと赤くさあつた。
是のむむ打對ひつる方、家どのの壁をい
と白く塗りわすし。た、お知らず川の鳥
も敷並みつるおぞ、かうさつる港あり。
此おは横橋の遠く、のいと唐か、いど、
よら馴れ、さるや、山さ舟さいと安く漕
流したり。さてその港、泊る。又の日は曉出
つらん、お早りと甚淨なり。卯月

の八日そ、佛拜む人の長をどきこめて、
男女袖もくして行交ふも下ぐらう付もまや
指月寺とりし寺のあつらふ立宮つりて見
まゐる、何ふも介りまゐる、花もて細や
うろろしきをゆり、その中は佛の毫
みそおほすともむして、わづはしき水も
て着し着るるを仕置さむ。寺の傍
には花梅なども花紅く咲きして付もく、
姥梅もくもかゝ教方よは付れど、色よ
く咲交りしとて、程行きて**彌生**の御神

と待つ。此お木君等いとさく教りて御
まじのせふあみりりあ。

彌生のおのれおまじあやの

いなきいしくしよらあをほりつ

と古よおの付もは此あみと誦めり。こ
お立深くふもあつれお、あそお棚
引きて、晴れも目も此おあし雨のを
降るらうも。あつれ此あの様ありける。
其よりあつれ、彼お留りて行く程
よ、面白きふも多く付りしとて忘れよ

雨の白峰
おもしろい

廿六日、嘗いよゝきく、夕方よゝきく

○二月

朔日、朝雉子ほゝりてきく

六日、あゝの垣の梅三回輪ひらけり、蛇初
て家より

九日、葛飾の梅新梅もどいちをもきき
ぬ、蕪幹を僅くきき

以ほと世間の若木の梅皆登りあり

十二日、此夜八返りて回螺はめてきく

此ほと嘗あゝと花やうゝきく、いと

をきく

十七八日のほど我垣根の梅登りあり

十八日の朝より回螺きく

あがほむ姐の椿や、咲出たり

廿二三日此ほど回螺しきりにきく

根岸あゝの梅さきりみしきり

此夕蚯蚓はつらうゝきく

廿四日、あゝのほむ姐の連翹や、さきり

あり、椿えはくき

廿八日、蜂はじや見えぬ

此ほど豊後杵杵や、鳴く
廿九日、峯の緋杵や、鳴あしり
葛飾の物つくく教る

此日即て雉の飛ぶ子見る

此日かつしかまで布穀鳴く

此程杵花登りあり諸木おほく
芽をける、豊後青軸を登りあり、

〇三月

朔日、朝車坂の北のけしみの櫛とてか
ほくろむびたり、

此程ある蟬の杏の花咲きむ

二日、此夕蚯蚓のありまきしゆ

三日、うしぶの雨より軒寺通中半前

こもりくさきぬ、車坂も九分の登り

その中門のうたれし九分あり、其外一だ
れ皆さうりあり

室の蛙や、鳴く、等々院の緋杵も
うば、鳴く、車坂の緋杵さるるあり

五日、上野もあさるあり、やれむとて
本や、鳴きむ

六日、比叡の嵐山や、暎出、四軒寺前い
さ、かちりきむ、隅田川をちりく、暎
初め、三圃の山吹や、ほろろびと
あぶ、門の李花、いさ、おに石へり、桃は皆
さ、このまあり

七日、四軒寺車坂山王あ、りしきりにち
る、吉祥洞内を、いさ、いさ、嵐山登
りなり、清水寺下一重や、いさ、いさ、
九日、堤のさくら、盛りあり、三圃の山吹
さ、いさ、いさ、李花、白桃も、盛りなり、

あぶ、嶺の一重山吹も、いさ、いさ、あり、嶺の
八重桜や、いさ、いさ、垣の桃や、ちり、嶺
の若楓葉皆芽、さ、いさ、いさ、

△比叡桜、五日夕六日朝、墨水十日夕
寅の盛り

十二日、墨水花す、いさ、いさ、いさ、散る
十四日、きのこの南風す、すみ、いさ、いさ、僅
にちり残り、三圃が、白髭も、いさ、若
木の桜、いさ、いさ、いさ、いさ、

十五日、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、

寺一寺りにちる、日暮も同じ、駒込
ごり橋より獲るあり、下のものは八重椿
あり

十九日、和泉掬の飛さるる、寺徒少
心助本橋迄さるるあり、おのり者如
躑躅垣、まきとくあり

廿一日、おのりのつじ、八重山吹さる
りあり、

清竹翁の夜や、さるるあり、此日
柳葉一まりに飛ぶ、桐の花や、

さく

深川牡丹盛りあり、木場を蘆
切鳴く、

二十八日、忍屋及り、しらの躑躅
さるるあり、西務島もさるるあり
おのりのふく、越えく、後年とさか
るるあり、こも、短し

○四月

朔日、御竹翁の夜さるるあり、給ふ
まや、こつるよ、

四日、寺竹葉の葉少しうづらふ。此
ほど桐の花さきりあり

十日、此以前卯木さきりありし

十二日、此相付暖月朗、丑一ツげり
つゝ多のいと近く来りて

十三日、此相成一ツ水鶏なく、

十六日、此曉子規一きりにかく、此鳥
あり。

十九日、朝、卯とあく多の卯と
こゆ、此ほど桐の花さきりあり

〇五月

二日、此ほど卯の花さきりあり

五日、柳の葉白くありし、此標や、
さきりあり。

月末、入替の合歡咲初む

〇六月

二日、此朝桐はじめて咲く

三日、夕べ此畷を蝶のふりさきり、下
寺の合歡咲あり

七日、此程木々の合歡や、盛りあり、

昭和七、七、六、
二八、みん、
鳴く、
鳴く、
鳴く、

子規水鶏あつちりうあつちりく、

十二日、墨水道入谷まの合歡みふ

ちりく

十九日、みん、
蜂もどりて鳴く、

此程信法院裏の合歡猶咲みたり

此木餘ふとは大きに異なり

廿二日、槐や、咲く、百日紅も木槿

もや、ささの定外り此れどより車

坂の寺の竹園もささ、まちりんをど

のころらま、啼く、

廿九日、枳車隊の寺の園も蟬聲

鳴く、

○七月

七日、つら、ほろ、しめて鳴く

廿六日、夜此れどより蟬聲や、床

近く鳴く、

○八月

八日、御竹箱の葛荒さるる道より

急井戸の蔭や、ささるる、東光院な

ぎ、此れど蟬聲、床より鳴く

十六日、萩すき〜留し〜此夕三田
山をつゝきり鳴く、

廿三日、此ほど本屏や〜匂ふ

廿五日、此の萩教場三田のもす
〜さかひ〜

○九月

朔日、つとめて初雁より来るや

四日、三田山の萩猶あり

五日、鶉も〜あて〜鳴く

廿九日、正燈寺紅葉や〜登、今少し

はやし

○十月

十一日、正燈寺紅葉あつ〜り、吾

峯の紅葉や、登りぬき、葉の紅葉

も河五日の萩も〜り〜

〜あつ〜中庭の萩も〜り〜

十五日、此の萩の紅葉も〜り〜

十年の文、比叡の紅葉も、清水寺

の紅葉も〜り〜

〜り〜

柳の木の葉もさきさきと青く
△雲も此月の始一帯ありき十三
甲の此木の葉さきさきと青く
すりぬ社の別當とて

十七日、観音の足許にさきさきと青く
半段の大本経書くさきさきと青く

二十日、此朝書くさきさきと青く
さきさきと青く、清水のおまきさきさきと青く
さきさきと青くあり、おまきさきさきと青く
さきさきと青く

廿一日、之廻のすきさきと青くあり
あり、おまきさきさきと青くあり
廿九日、午時さきさきと青くあり
さきさきと青くあり

○十一月

十九日、此の柳木の葉さきさきと青く
さきさきと青くあり

七部集 巻句

○春乃日

春乃くや人さあ 此伊勢集也 荷多

奈良坂や畑うら山の八重ささく 且葦集

蛙のふゆさゆーま 蛙さけ 蛙水

咲よけの菊よの折 中 白雲路を 越人

山小きのあひるさ 岨のうつ水 越人

以下附合せく 巻句のこし

○冬乃日

狂句さかしく 此乃の竹多し 似る水 芭蕉

と川の石のこもりも稔きとくへる 楚水
ほらとくひて月よりあけ雲のうら 杜國
炭賣のよりのつまこも書りりる 重五
雲月や鬱ウツクの行々あしひめく 荷宮
つらとくせよと雖面う〜とつり豆敷 西宮

○ひやこし

本乃もたに汁も鮫も 桜のれ 翁
いろ〜の名レふあも〜の きの州 砦碩
鉄炮の遠きよは雲の卯月外 野纏
急の甲意〜も 時を鳴もせん 乙州

時迄や苗代竹乃角大師 西宮

○猿蓑

初〜く水猿も山蓑もほけけ也 芭蕉

こゝには附合の表句もあらず以下排句数多あり

さきの羽も剛カウカウめとら〜く水 去来

こゝは表句也

市中い物のまほひやまは月 元也

灰汁桶のちや〜らりあり〜ん 元也

あゝあゝ集すり〜の書のさろ〜け 芭蕉

こゝに幻住庵記あり 芭蕉州

ここに菱句集あり

○續猿蓑

八九月宵て雨降る柳の風 芭蕉

雀の字や揃めてはるる鳥の声 馬寛

ひさし立巻川すゆる岩の音 里圃

猿蓑ももれさるる木の松の影 治圃

ここに今宵賦あり 野望子 支考

友のあや前々明冷々物 芭蕉

ここに四季にかきて菱句集あり

○炭俵

おめくしのつよ日の出る山路外 芭蕉

兼好も遠嶺りりり花ささる 花を

こぞ豆の祀さきにけり麦の縁 孤庵

子を裸父おてくわく早苗舟 利牛

ここに四季の菱句あり

ここに詠諧秋之部とふあり但し

附合なり其菱句を

秋の空屋止の杉と詠のそり 其角

るそり吟ひあつめて葉山子川 柳橋

振舞の扇あはれとあひまを講 芭蕉

雪の杓抄道にみゆきと尚書一 杉風

○阿羅耶

花三十句

杜宇二十句

月三十句

雪二十句

嵐旦一

初冬

仲春

暮春

初夏

仲夏

暮夏

初秋

仲秋

暮秋

初冬

空月

仲冬

兼題五首

歳暮

雑

述懐

恋

世を

釋教

神祇

○曠野集自序

麦とわすれ集はおふれぬ確からし

遠沙や浪と志をえらん樹と心 島句

筆しき能くきりまの山 子歌

ちとまに結む心のおもひあり 恋句

月よ柄をさし〜のふり廻り 恋句

蚊のおもひをのりゑの蚊の心 恋句

層々もも志をうらぶそらひはや 恋句

ちり美ふ春の文や天津丁 其角

赤らら〜新酒を人の醒やをさ 其角

初雪や〜のひささ 相の本よ 其角

一里の炭をきりし冬 其角 一井

坐禪和讃

白隠和尚選述

眾生亦求佛あり 水と氷のそとくは
 めいよはなれど氷はく 眾生のみは佛あり
 眾生は迷きまを不知と 迷く求むはけり
 譬へば氷のやうなると 湯を呼ぶはこころあり
 長者の家のみちをりて 貧乏の迷ふ異なり
 六趣輪廻の因縁あり 己が愚痴の因縁あり
 濁政のやみぢを踏まへて いつは生死をけれまへて
 夫れ摩訶衍の存定也 福歎するは解あり

布施や持戒の徳波羅蜜 念佛懺悔修り等
其功多し徳善なり 皆この丹の物するなり
一毫の功をみる人も 積み世の累を
悪趣いつくよりぬき 浄土即ち遠く
辱くも此の法を 了らば自らよき時
さんたん徳をさす人の 福をゆるす事能はし
いけん自ら回して 直る自性を證する
自性即ち母性も ともに成徳を證する
因果一如の門ひらけ 世二世三の道直し
母の相の相とく 行くも物も余おる

世念の念を念とて 識る母性の法
三昧母性の空ひらく 四智圓明の月さる
は時何より取むこと 寂滅現前す故
當に即ち蓮華國 此身即ち佛あり

借選百首

漆山又甲郎選

○後水尾帝捨ふより世給ひける (退閑雜記)

あれなり木常々捨ふのなきやむは母に漆寝の夢みる前

○皇嘉門院尾張 新古今

なほゆめおまつい人まつらむし此世あやれむくい道

○蒲生氏郷

かきうりあれはあふねと記はちしものぞ心短きあの山風

○源實朝

あふふれ夫がみつるふいふいふのよゝ霧たげしる那須
の篠原

○肥馬水申也 西方に枯守をゆく

ゆるぎなき八幡山崎なまきかすあや中ゆく淀の川舟

○室鳩巢

なうけしゆるて柳のふし面みは葛のふかみ根みあり

○杉系を遊女粧 号文鴛、花女と稱せしむ

夏衣あはれはむとへふあしこも君が心よりうらやあらん

○西園寺 統後撰集

枯果こゝ言のまもるま真葛原何ぞ恨みのおぼしき秋風

○蓮月尼 題花のころ旅ありて

宿かよぬ人のつらさをなまけうて勝月あはれの花の下段

○平忠度

行もよそ木の下蔭をたふせば花や今宵のあしあし

○吉田兼好

世の舟を流りくつて今さしこ阿波の鳴瀬浪風門

○僧正遍照(良岑、宗貞)

たうちぬかれとてし鳥羽のあが思髪はなすすあり

○松平定信(黄昏の少将)

心もたぐく夕霧の花うらと君のうらあはれを宿

○大田道灌

とまかすはぬさきわを旅人の旅がりはるくお政の村

○西行

のろくく花さきついでとて一物も同じ色も
掛た

○

わがの浦沙みきく水はほそくき
田舎れき

○

庭をいそぎてかきよめよ夕立に
あうら

○佐川田舎六

うし山籠まつ頃の朝なしく
心まろる峰の白雲

○稲掛大平

題朝落苑

宿りせし山籠戸の朝なけき
まのたは心の籠も

○一げ子

土岐頼房の室

みづにそりけりともまよひなかるる物

いはけをくいのれささむらにた
をりてか花出の山み

○矢部正子

惠静尼、先夫に親を

枯すす秋にあひて枯にしもの
今ききた花の上風

○木下長嘯子

たましくげ明けぬらぬ
さつらにあい

たびも事ぬせよとす
ぐさらし

○武長小兵衛

一葉ふちる柳の縁の絶
間もあが

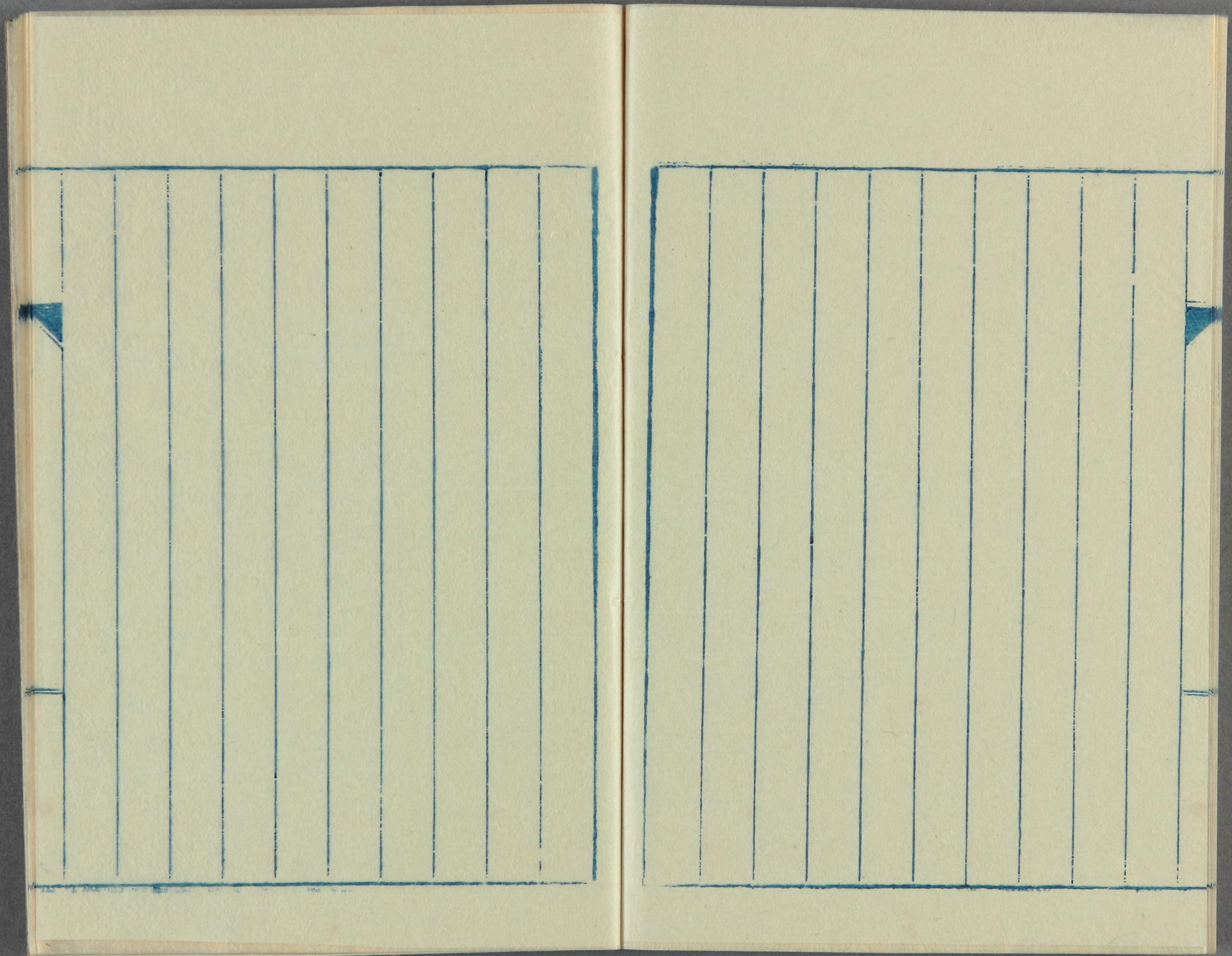
たし細く秋の三日月

○明名城

初^ハの雨^ニ七^ツ窓^ヲま^しう^しま^して^しく^く染^レ心^ハ始^メの^まり

○相商彌 はらひの^ち教^へる^は彼^ノ國^ノ遊^ヒ先^ニ

言^ハせ^て月^ヲく^く漏^レぬ^板ひ^さし^連く^栞み^あら^せせ^る神^ノの^國守^守



以下全て
白紙

